

朋誠堂喜三二と狩野周信——幕末明治期における「戯画図巻」受容——

齋藤 真麻理

*キーワード

朋誠堂喜三二・狩野周信・戯画図巻・倉田幽谷・南新二

一、はじめに

十七世紀狩野派において集中的に制作された「戯画図巻」は、和漢の故事人物や異類が遊び興ずる場面の連続から成り、あたかも狩野派内で創始継受された主要画題の総覧といった感がある。本作は詞書こそ持たないが、室町物語や能狂言、古浄瑠璃、また奈良絵本などからも多くを取材しており、ことばに満ちた文芸的作品と評し得る。

諸本は現在、国内外に十余本の伝本を確認できる。^① そのうちの架蔵本について、秋田藩江戸邸の留守居役にして黄表紙や洒落本、狂歌作者として活動した手柄岡持、すなわち朋誠堂喜三二（享保二十・一七三五～文化十・一八一三）が偶目したと伝える図巻そのものか、少なくとも同系統の図巻であって、喜三二が各場面にふさわしい狂文狂歌を制作していた可能性が浮上した。

また、喜三二の手がけた一篇を明治期の作家である南新二が所蔵しており、南が記した記録を幕末明治期の儒者である倉田幽谷（務）が書き留めていることも判明した。

ここにその概要を紹介し、秋田藩内の人的交流や、幕末明治期の「戯画図巻」受容のありようを検討するとともに、「戯画図巻」の図様のコンテンツテキストに関する若干の見通しについても示しておきたい。

二、喜三二と「戯画図巻」

明治二十五年（一八九二）、倉田務は弟子にあたる中村忠誠らの勧めに応じて「いとわかき頃より或は故老のものかたりを聞、あるハふるきふみともをけみして、めつらしとおもふふしくをかきあつめおけるもの」を一輯にまとめ、『筐底雜誌』と題して発行した。

倉田の目を引いたのは「或人」の所蔵する六帖の狂文狂歌で、朋誠堂

喜三二が絵画に題したというそれであった。本来、十一帖を備えていたらしく、「或人」は新聞に記事を掲載して後半五帖のありかを尋ねたが、行方は分からなかったという。

○左に誌せる。手柄の岡持か。晝に題せる狂文狂歌は。すへて十一帖ありて。上六帖を上巻とし。下五帖を下巻とし。并せてふたまきあるなるを。或人上の六帖の寫しを持てるか。下の五帖の見まほしさに久しく尋ねあされとも。いかなる事にや。翁の家の集にも見えず。又知る人も無ければとて。そを新聞に載して。あまねくこれを世に問ひしか。我こそ持てり。とそのあとを。出せし者も聞かさりき。

〔『篋底雜誌』第一集、戴抱精舎、明治二十五年刊〕

以下、『篋底雜誌』は喜三二の序と六図分の絵容、狂文などを紹介している。その絵容や掲出順が架蔵の「戯画図巻」にまったく一致する⁽²⁾。従って、喜三二が目にしたのは当該本であった可能性も考えられるのであり、正確を期すため、倉田の引用したものと文献に当たっておこう。

倉田は「或人」の実名や新聞紙名を明記していないが、ここにいう新聞とは「読売新聞」である。明治十五年（一八八四）の三月から六月、計八回にわたって「南新二」が自身の所蔵する喜三二の狂文狂歌を連載紹介しているのである。その絵容を仮に「戯画図巻」の場面タイトルとともに示せば、第一帖「鼠の正月風景」、第二帖「諸葛孔明と一寸法師の曲芸」、第三帖「蛙の舞楽」、第四帖「文覚と弘法の足相撲・時宗の行司」、

第五帖「韋駄天の風揚げと足疾風鬼」、第六帖「観音の射的」の計六図。残る五帖は喜三二の序からおおよその内容を想像することができる。

以下に南の記録した全文を掲げ、本稿末に掲載した架蔵の「戯画図巻」と比較してみたい（原文には今日では不適切と思われる語彙も見られるが、研究の必要上、そのまま引用する）。

①「読売新聞」明治十五・一八八四年三月十八日朝刊三頁「寄書」

○左に掲ぐるものハ手柄の岡持翁がものされたる狂畫の詞書なりやつがれ其寫し一卷を藏すといへども惜むべし十一帖のうち第六帖までを一巻とし後五帖を藏せず此狂文ハ翁の家集我面白にも入らず知る人の稀なれば藏する一卷を餘白へ投じて江湖の一覽に供す諸君若全部を藏し給ハ、俱に餘白へ投じて翁の遺書を全からしめ給へといふ 南新二

序

土佐光信の狂畫を狩野如川の寫したる一卷ハ一指菴の主人田代氏のをさむる所にして其繪の趣きハ何によりて書るといふにもあらで心にかめる儘に筆に任せたるにや耳をとりて鼻をかむてふたとへにも似たると思ひよらぬ事のみなるが十あまりひとつ何れも心の外ならぬハなし素より畫がけるも寫せるも其筆のすぐれたる人々なれば世の常のかきさまにハあらずみやびなること眼を驚かせるばかり深く愛べきものなり此一卷に添て見る人の笑ひをまさしむべければやつがれに例の狂歌かきてよと主人の求め給ふに只戯れうたのみ書

てんも興きようすくなからんと思ふより此繪このゑがける人の心こゝろにならひてうつなき事を筆ふでに任せてしるしぬれバ思おもひの外ほかにいと長ながくなりぬ初はじめの一帖いちてふハ御代みよのためたきを祝いはふ心こゝろを含ふくめる狂歌きやうかのみをしるす第二帖だいにハ今いまいふしやれ本の趣おもむきにて今の世よに行おこなはる、詞ことばにてしるしたれば後の人のちの見てハさぞな怪敷あやしくめかしたこそおもふらめ第三帖だいでハ今昔物語いまむつものがたりなどやうの書かきさまなれども才拙さいつたなけれバ尤またも賤いやし第四帖だいでハ落おとし語ごしてふ趣おもむきに書かきとゞめぬ第五帖だいでも又また其趣そのおもむきなり第六帖だいでハ聊か佛法ぶつぽふをさみする戯はれ事ことなり第七帖だいでもしやれ本落ほんおとし話ばなしの趣おもむきに書かきとゞめたり第九帖だいでハまことにうつ、なき繪ゑ双紙ふたごうしの趣おもむきをしるす第十帖だいでハ佛ぶつ菩薩ぼさつの方便ほうべんのありがたき事を述をぶ終はり十一帖だいでにハ今専いままら行おこなはる、集會しやくわいの趣おもむきにて狂詠きやうえいをしるし侍はべり何いづれも書かきさま可笑をかしからず又また可笑をかしからねバ見みる人ひといたづらに日ひを費つひやすに似にたるべしされバ見給みたまはずとも恨うらみ侍はべらじさみし給たまふとも素もとより腹はらハたてじ 文化元年ぶんくわくわんねん甲子かのえねの霜しもふり月づき七十漁翁手ぎよやうてがらのをか持老もちおいにほれて申す (以下次號)

【架蔵本・巻末および箱書】「序」によれば、喜三二が目にしたのは「土佐光信の狂画」を「狩野如川」が写した一巻で、一指菴の主人田代氏の所蔵本であつたという。狂文狂歌を作したのは文化元年（一八〇四）甲子の陰曆十一月。とくにめでたいとされた甲子の子年も暮れようという頃、とくに大黒天にゆかり深い霜月のことであつた（『日次紀事』「十一月条ほか」）。喜三二らが「鼠の正月風景」から始まる図巻をさぞ楽しんであろうことが想像される。

狩野如川周信は万治三年（一六六〇）生、享保十三年（一七二八）没、

初名は右近。如川、泰寓齋と号した。狩野常信の長男で、木挽町狩野家の第三代当主である。正徳三年（一七一三）に父の跡を継ぎ、享保四年（一七一九）に法眼に叙せられた。

後述のとおり、周信筆の「戯画図巻」（絹本）が大英博物館に所蔵されている。全図は『秘蔵日本美術大観 2 大英博物館Ⅱ』（講談社、一九九二年）に収録、一部は同館のCollection onlineよりカラー画像が公開されている。『秘蔵日本美術大観』から「47 戯画図巻」解題を引いておこう。

本図巻は中国や日本の古典、さらには動物戯画などに取材しながら、それぞれの主題を面白おかしくパロディ化した、狩野派としては珍しいものである。（中略）絵の技術的な巧拙は、一見して卓抜なものではなく、力量不足が如実に現れている。ただ、こうした戯画的な画題は珍しい。狩野派における戯画は、探幽たんゆうあたりが三福神などを踊らせる頃から始まったよう、安信門下の長老とおぼしき狩野宗信むねのぶの「化物図巻」などにユーモラスな表現が見られる。大徳寺真珠庵本の「百鬼夜行絵巻」の模写も、江戸狩野派が歴代続けてきた模写であり、狩野派にわずかに見られる戯画的要素を伝えている。とりわけ本図巻のパロディは、安信門下の俊才、英一蝶はながさいの戯画と気脈を通わせていることに注目する必要がある。

（安村敏信）

しかし、大英本は「戯画図巻」の諸本とは図様が大きく異なり、いわば孤立した伝本といってよい。喜三二の文章とも合わず、「土佐光信の狂画」という伝承も伴わない。

一方、架蔵本の巻末には「此一巻土佐光信狂畫圖／周信寫（落款）」とある。箱には墨書紙片「土佐光信狂画圖」「周信之写」を貼付する。真贋は今ほ措くとしても、以下の絵容ともども喜三二の残した記事と合う。

さらに、喜三二のいう「一指庵の田代氏」とは江戸時代中期から後期の武家、田代尚亭を指す。宝暦五年（一七五五）生、文政六年（一八二三）没。喜三二より二〇歳ほど年長の同じく秋田藩の藩士であり、名は綱紀、字は伯拳、通称は但見、新右衛門。別号に非仏、柏宇とも号した。詩や書をよくし、俳諧では「一指庵一馬」の号をもつ。喜三二はこの田代のもとで「戯画図巻」を目にし、求めに応じて狂文狂歌を作したのであつたらう。こうした経緯からは、狩野派の「戯画図巻」が武家や大名家のネットワークの中で継受された一面が浮かび上がってくる。

田代との交流から綴られた喜三二の狂文等は、おそらくは図巻とは別仕立てで制作されたと推測される。明治期に南新二が所蔵していたのはその前半六帖のみであり、すでにこの時点で後半五帖分と図巻そのものは所在不明になっていたのであつた。

喜三二の当該作については井上隆明「朋誠堂喜三二年譜」が「文化元年 甲子 一八〇四 七〇歳」の項に静嘉堂文庫（松井簡治旧蔵）に七帖分が所蔵される由を記すが、書名には触れていない。

○古狂画への狂文賛（倉田幽谷「筐底雜誌」第一集・明治25）。土佐光信画を狩野如川が模写、それに詞書を添える。全十一帖のうち七帖まで静嘉堂文庫蔵、松井簡治氏旧蔵。

（『喜三二戯作本の研究』、三樹書房、一九八三年）

森銚三は昭和十三年七月二十二日にこの本を閲覧したという。

二十二日 久々にて静嘉堂文庫に赴く。普通本の外に、既に整理の終りし松井簡治博士旧蔵本の数点を見る。（中略）手柄岡持『たはれ絵詞』一冊、松井本なり。土佐光信の狂画を狩野如川の模せるものに詞を添へたるにて、すべて十一帖ある筈なれど何故にや第八帖以下を欠けり。文化元年岡持七十歳の作なるよし、序文に見えたり。岡持の滑稽は重苦しくて軽快味に乏しいへども、絵に抛りて想を構へて一種の文学を創作すること、その独壇場といひて可なり。これと同種のものに『加言二十四孝』あり。全文は先年写しおきたれど、未だ発表するに及ばず。（『読書日記』『森銚三著作集』続編第十四巻、中央公論社、一九九四年）

当該作は「手柄岡持たはれ絵詞」の書名で静嘉堂文庫（松井文庫）に一冊を所蔵する（『静嘉堂文庫国書分類目録 續』一九三九年³）。そののみならず、十一帖揃いの写本が筑波大学図書館、国立公文書館（墨海山筆の内）等に所蔵される（後述）。詳細は別稿を期すこととして、本稿

では幕末明治期における「戯画図巻」受容を追うため、喜三二が見たであろう図巻について、前半は南新二の「寄書」、後半は筑波大学本により、架蔵本との合致を確認したい。

②「読売新聞」明治十五・一八八四年三月二十三日朝刊三頁「寄書」

○手柄の岡持狂文の續第一帖

（畫容）龜鼬猿猴毬打の戯れ又猿猴羽子を突蟻螂はま弓を持てり
蝙蝠も居たり鼠陀螺をまはす猿万歳となり猫才藏となり松飾あり
納れる御代の愛度きためしハ古へより書ふるびたれバ今更に珍らし
げに云べきにもあらず仁徳の御宇延喜の聖代といふとも今の御代に
はしかずされバ尊きも賤しきも身の程々につれてやすらに悦びたの
しまざるハなし其樂み人の上を越えて虫獸類のたぐひまでも見眞似
びて初春の遊びをなすことハ此巻物の繪にあらはせるが如しされバ
此繪によれる戯れ哥十首

龜甲な御代ぢやと龜も及なき地口云宛萬代やへん
己名のあいたちことや笑らん毬打の玉の面を春の日
堯舜の世にも猿と突羽の高きみかけを仰ぎ社みれ
鄙ぶりにまざるの遊び都振ぶりく毬打玉の初春
蝙蝠の羽根を畳バ禮扇開きて仰ぐ御代のいさをし
陀螺廻しちつとも友に負じとて氣を春風の福鼠哉
蟻螂が己と恥て破弓の引ず翹たぬ御代に野邊伏
猿松も大夫の爵を給りて御万ざい所に脈を春の日

初春のあさくままねか（本のまゝ）打鼓ち、たる日影今やさくに
やん

扱思ふに

かめかうもりいたたらう
ねずみさる
かめかうもりいたたらう
ねずみさる
かめかうもりいたたらう
ねずみさる
かめかうもりいたたらう
ねずみさる

【架蔵本・第一図「鼠の正月風景」「猿と猫の萬歳」異類たちの名称は記載されないが、右の絵容と一致する。以下の五図も同様である。「鼠の正月風景」は「戯画図巻」の諸本にこれを冒頭におく伝本が多い。この場面は、室町物語『弥兵衛鼠』（スペンサー・コレクション本等）より弥兵衛の失踪を嘆く奥方を描く挿絵の構図を用いながら、この白鼠夫婦を助けた物語の登場者たちが勢揃いして正月の遊びを楽しむというめでたき図様に転換されている（拙稿「蟬啼鼬嘯——『鼠草紙出世物語』と『異代同戯図巻』——』『中世の物語と絵画』竹林舎、二〇一三年五月）。

③「読売新聞」明治十五・一八八四年三月三十日朝刊三頁「寄書」

○手柄の岡持狂畫詞書第二帖

（繪容）孔明枕の曲をする其脇に放下つかふ男ありは日本人に
て頭大きくせいひき、男なり

むかし男有りけり（此男いかなるものにやもしも小櫻けしの助と云しものか猶考ふべし）此男ハ今いふ一寸法師にて頭ハ常のごとく
なびてかたちハ稚子の如くなりけれバ身のたつきも心に任せざりけ
るが品玉あや竹などいふ放下てふ業を覚えて世のすぎはひとしつれ

ど我に優れる者の出来にけれバ人も彼が業ハ愛ざりける男思ふやう
日の本にてハ此事のおこなはれずとも唐土にハ斯る業してんものも
あらじと覺ゆいでや唐國に渡りて唐人の眼を驚かしなんとてやがて
唐國にぞ渡りける此時もろこしにてハ三ツの國亂れたるをりしもな
がらさる中にも珍かなる業ならバ人も見るべし先此國の名におへる
人を頼みて我望みを遂んとて國に名高き人を問へバ此蜀の國にてハ
諸葛亮孔明才勝れ名たる人なりといふにとく行て孔明が從者を
もて云々の望みを言入れバ孔明先其業を見て後望みの趣きを考へ
てんとて深く招き入て彼が業を見る男ハ爰ぞ眼を驚かす際なれとて
容々の放下をなせり孔明ハ彼が業をさのみ心を留て見るにもあらで
おのれハ枕あまた取出して高く積上て中を抜かふるなど其曲のきた
へねれること甚妙なり男ハおのが業を取置て只肝をけししてありしが
孔明に向ひ云やう(をとこ)されバお前さまハけしからぬ事で御座
ります如何してさやうな事をお覺えなされました(孔)覺えずにす
まふかおれハ蜀の元帥だ(をとこ)ハアお前さまハからの源水さま
で御座りますかさやうなら獨樂もなされませう(孔)イヤこまハ
やめたコレ(關)張坊も張坊も來さッせへ(關)張飛)アイアイ
(をとこ)何故獨樂ハお止なされました(孔)己ハ親父の名の松本
幸四郎になつたから高麗ハ止た(男)きもを潰し呆れて居る此時關羽
張飛次の間から出て來る(孔)那の男の藝を見たか(關)あちら
から(張)私も見やした(關)コレ手めへハけしの助が弟子か親
か今のか(をとこ)あなたさまがたハ初めてお眼に掛ります私しは

今日爰の旦那の御高名を承知りましてチトお願ひが御座ッて(關)
ム、聞たよ(張)コレ手めへハ呉孔明をうけたまハつたといふが此方
の御方は蜀の孔明だ(をとこ)ハイいへ私しの申上ましたハお名の
高い(關)コレしやれをさうまじめに受られてハあやまるヨ(以下
次號)

④「読売新聞」明治十五・一八八四年四月一日朝刊三頁「寄書」

○手柄の岡持狂畫詞書第二帖前號の續き

蜀と申字ハ飯といふ字で御座りますか(張)此方の親方ハ大食だか
らそこで(關)コレ(張)又まじめに聞だらう蜀と云字ハ蜀魂のほと
の字よ(張)蜀黍のもの字だ(關)もろの字若狭の介ぢやあねへ
よ(男)いよいよ呆れてお前さまがたハ日本の事がけしからず明る
う御座ります(孔)斯あかるくツちやア幽靈の細工ハ出來ねへと
三朝が云だらう(男)いよ(へ)こみてチト古う御座りますがざり
とハ恐れ入谷の(張)鬼子母神で思ひ出した太郎さまハ如何だの(を
とこ)今以て流行ハはやりますが(關)福助程でハないかといふ所
へ趙雲丈八の鉞をさげて來る(趙)ハイ先生此間ハハイ兩公(關)
(張)ハイ此間ハ(孔)よく來さしツた珍らしい男が來た(趙)ふ
りかへり見て笑ひながら小聲にハ、ア日本だの叶と云字の上下を着
せて見たい(張)形は福助めいたが工面が悪くツて來たのだ(關)
放下や手づまが出來るよ(趙)ハア見たいの定めて黒い事だらう
(孔)鼠色だよ(張)わる紙といふ位の色で(趙)なま壁とハいかぬ

か(をとこ)こいつハしまったと思ひながらハイ旦那お初にお眼に掛りましたお眼を下さりませ(趙)おめをくれるか是ハ御免だ眼を遣ると此方から旦那お旦那おだくと言物だ河原崎のお眼なら遣つても惜かあねへ(をとこ)何方もく恐れぬきますモシお前さまのお持なされたのハ長いお鎗で御座ります(關)されバよ何故爰まで持て来さした邪尸な物を(趙)されバよ外へ立掛て置うかと思たが盗まれちやあならねへからヒヨット内へ持て這入たがそこら中へぶつかつて置所がねへやつよ(をとこ)夫ハ何間御座ります(張)丈八の鉦とつて一丈八尺あらア(關)裁だと禪が三筋出来る手めへのにやあ着物にも澤山あらう(をとこ)爰ハしやれる場であらうと丈八ならおこまにハ敵薬で御座ります(趙)昔ハ八丈あつたが(孔)エ、く妙だく(趙)あんまり長へから切た(張)時節柄儉約で段々切詰たのよ(關)おれがのを見せう次の間にあるから手めへこけへ持て来や(趙)ソレ次の間の連子の耳盥と駒下駄のある(張)コレ馬鹿ア言ツしやるな(趙)アイ御免なんし(關)久しいもんだ(をとこ)次の間へ行き又出て来て途方もねへ私しにハ持れませぬ日本で五月飾る青龍刀の取扱ひにハ參ませぬ(張)せいりうたうー(關)何だ奇妙な聲を出したの(趙)わからんく(張)替りじまのさんどめと並中のこく餅(孔)ハ、ア今のせいりうたうハ大丸の人を呼ぶ聲かちツと六かしい(趙)あんまりすぎたからおらがにやア聞えなんだ(張)おれが所へ習ひに来さつせへ(をとこ)まだお次に飛た棒が御座りました那れハあなたさまのかへあれでぶ

たれたらさぞ痛ふ御座りませう(趙)そんなじや棒なことを言ねへもんだ(張)こいつハ妙だ新しいく今日の書拔だ(趙)おきやアがれ(皆々)ハ、ハ、(をとこ)私しハ皆さまのおしやれを聞につけても大分了簡が違ひました斯様に通なお方が(關)唐にイもあるか(張)ツンテン(孔)なまなかまみえ物思ひか(趙)縁と時節の末を待ツせへ(をとこ)ア、なんとしやう(從者出)旦那お夜食を指上ませう(岡持)惜き筆とめ候かしく
新二云文中太郎荷稻福助の流行幸四郎男女藏などの噂あるハ當時の容を見るの一端とするに足るべし

【架蔵本・第二回「諸葛孔明と一寸法師の曲芸」金紙に「諸葛孔明」と墨書。孔明は古来、武人の尊敬を集めた人物であり、作品の享受層が武家であることを窺わせる図様とされる。

⑤「読売新聞」明治十五・一八八四年五月十一日朝刊三頁「寄書」

○手柄の岡持狂畫詞書(前號の續) 南新一

第三帖(繪容) 秋の野に蛙十疋ばかり各の樂器を持舞樂を奏す琴
ひくハ姫と見ゆる蛙なり

今ハ昔し錦の小路に住ける男の草の花の盛りなる頃紫野を通りけるに蛙あまた集り樂器をかたのごとく備へて音樂をなす男あやしみて木蔭にやすらひて間に秋風樂を奏するなりけり上臈と覺しきさましたる蛙の琴を調へ鳥兜着て舞ふもありけり樂の半なりし頃かたはらの草むらより大なる蠖出てしばし此ありさまを見るやうにて又草

むらに入しが友蝮にいふやうかたくに能き食を與ふべし我と共に來たりて心の儘に吞べし我斯知らするからに我にハ蛙蛙をのませよいざとて草押分て出けるに蛙皆色を失なひてのがれ去らんとするを琴ひける姫あまたの蛙を押とめて云やう斯蝮君に圍まれ參らせたれば途ても我々が命ハ君達に參らすべしされバ逃隠れもし侍らじ爰にひとつのねぎ事あり我輩の君達の爲に命を失なふもの尠からずされバ彼等が跡とはんとて今日の舞樂ハ催し侍り其甲ひをさへ果さで君達に吞れ參らせんもすくせの業報にハあらめど暫時の暇を給はらバ思ふ儘に調べをなして過し蛙等が跡をも弔らひ我々が最期の思ひ出ともなしたくこそ侍れと悲し氣にいふを先に進みし蝮聞いていふやう斯の理りをも聞入れぬハ木石にも劣りつべし我等も其糸竹を聞いて心を慰まん心靜にかなでよといふに蛙等悦びて皆々もとの座に着こたひハ想夫戀を奏す其聲鳴々然として怨むが如く慕ふが如く泣が如く訴ふるが如く餘音嫋々として絶ざること縷の如く蝮等口より涎を流し皆々繩の如く結バふるまでに寄こぞり妙音に聞とれて吞なん心も打忘れたるに何時の程に來たりけん數百のなめくぢ彼蝮を取圍みて次第に近寄ぬくちなはら恐れをなし逃んとすれどもとへはたへに取巻てげれば今ハあまたの蛇柱など立たる如く立上りて苦しげに見えしが躰ハおのづからとけ流れて終に地上に倒れ消失たり是ハ初めにひとつの蝮出たりしを姫蛙の眼早くも見つれば再度草むらに入しハ友をいざなひ來るらんと悟りしより早く蝮に使用して斯ハはからひける此時なめくぢ等申て云ふ先に御使を給はりしよ

り速かに多勢をかたらひ集めて參りつゝあまたの御命を救ひ奉りぬ此上ハ御使にも云ひおこせ給ひし如く我我が命ハたすけ給へといふに姫蛙のいふ恩を酬るにいかで仇をもつてせんや汝等心安かれといふに蝮等悦ぶこと限りなし折しも今宮の方より鹽賣をのこ來たりて彼蛇のとけたるにすべりて横さまに倒れたるが蝮等がこぞり居たる上に鹽のあまた翻れか、りけれバひとつだに殘らで夢の間の露とぞ消失たり姫蛙を初めて皆々袂を絞りけるが其中に心無き下部の蛙等ハ斯とみに消失んことを知らバ先に二ツ三ツ吞てん物をなどいふもありけり姫蛙のいふ世の中のさまハ斯もあぢきなきものとかや我々を吞んとせしハ蛇等が罪なれどもはかりごとをもて失なひしハ我罪なれバ我身にこそむくふべきをと云も終らぬにあらけなきをこの大なる袋を持來たりて赤き蛙ハ幼稚兒の疝の薬に賣らん青きハ鯁釣るによきぞとてひとつも残さず袋に納めて去りぬ初めより見居たる男の甚あはれがりて

秋野の小萩刈てふ夫ならで身ハ朽繩の結がひぞ無

鹽竈の浦社いなめくぢ共秋の野邊には量ざり劍

青より紅染るかへる手もつれなき秋に散ぞ果ぬる

斯よみて歸りしとなん語りつたへたると也

【架蔵本・第三回「蛙の舞樂」異類名の記載なし。秋の野で舞樂を奏する蛙たち。琴を演奏する姫蛙の姿も見えるが、諸本でこの場面にしばしば登場する狸は描かれない。その点、蛙・蛇・蛞蝓の三すくみによって狂文を構成するには格好の図様であったといえよう。なお、大英博物館

本は大きく図様が異なり、秋の野で狸、猫、鹿が合奏を楽しむ風景が描かれる。これは「戯画図巻」の諸本より、むしろ新出の個人蔵『化け猫草子絵巻』（江戸時代中期）の一場面に近い（参考図版①②）。新出絵巻は飼い猫が化け猫となり、退治されるまでを描いており、前半で猫は赤い手ぬぐいを銜えて秋の野へ出かけ、狐狸に化け方を教わる。その挿絵は大英本の合奏の図様に近しく、左から狸、猫、狐を配しており、つまりは大英本の鹿の位置に狐が座するような構図をとる。狐の背の曲線や腹鼓を打つ狸の様子など、三者のさまは大英本に近似し、「戯画図巻」との関係を想像させる。

⑥「読売新聞」明治十五・一八八四年五月十四日朝刊三頁「寄書」

○手柄の岡持狂畫詞書第四帖（前號の續）南新一

（繪容）弘法大師と文覺上人と脛押するを曾我の五郎うしろに立
て見て居るなり

いつの頃にやありけん鎌倉に一人の翁ありけり性質魯鈍にして若き時よりひたすらに學問の道に心をゆだねるといへども老ても其しるしなれば名も聞えず有りしが此翁或夜思ひよらぬ夢をぞ見たりける弘法大師と文覺上人と脛押するを曾我の五郎が見て居たる夢なり怪敷心に掛りたればかねて相知れる夢判のもとに行きしかなくと語り判じて給はれといふに夢判が曰都て夢ハ逆夢とてさかに判ずる事なり先五郎を判ずれば老後なり文覺を反ずれば學問なり翁ハ斯老の末ながらも學問に凝たまへど譬へにも老人の學問とて無益の事な

り老後の學問をやめたまへとの告なるべし又翁の物喰ひ給ふこと若き人に劣らず老てハ氣血の運動おとろふるゆゑに食物消化せずして腹のうちに湛ゆればこそ斯る夢をも見給ふらめ弘法ハ空海なれば空海を反すれば彌喰ふなり今より老後の學問をやめて粥を喰ひたまへといふ夢なりといふ翁聞て空海を彌喰ふとの判談など穩ならずといへどもさばかりの事ハ有りもすら脛押の事ハ何とか判じ給ふや是も逆夢ならバ押脛とこそ判ずるならんおしすねの御判談承ハリ度こそ候へといへども夢判ハ何とも答へざりければおしすねの判談いかにくと問ひけるに夢判さあらぬ体にて其時おしすね少も騒がずとぞ言ける

【架蔵本・第四圖】「文覺と弘法の足相撲、時宗の行司」金紙に「文學上人」
「弘法大師」「五郎時宗」と墨書。

⑦「読売新聞」明治十五・一八八四年六月三日朝刊三頁「寄書」

○手柄の岡持狂畫詞書（前號の續）南新一

第五帖（繪容）足疾鬼舍利塔を盗み逃る韋駄天風を上給ふ

往古足疾鬼といふ外道ありて釋迦如來の佛骨を望み盗み取逃げるを韋駄天取返し給ひたるよし其佛舍利ハ東山泉涌寺に有りけるを足疾鬼ハ猶執心残りて折折伺ひ寄ることあれバ韋駄天堅く守護し給ひけりされども怪敷き事どもハ夜のみなれば畫のうちハ心を緩したまへり頃ハ彌生なかバ空のけしき殊更にうららかなるに韋駄天の御子に似駄天と申せしが七歳ばかりになり給ひて風を昇せ給へりさ

⑧「読売新聞」明治十五・一八八四年六月十二日朝刊三頁「寄書」

○手柄の岡持狂畫詞書(前號の續)南新一

第六帖(繪容)觀世音星場にて鐵砲を打たまふ脇に天人の如くなるもの火繩を持居る埜の脇に木兎ざいを持居る埜の内に梟も居たり

準提觀世音此程頻に鐵砲を稽古したまふよしを聞て或人何故にやと問ひまゐらせしに觀世音のたまはく觀音と稱するもの六佛也といへども勢至菩薩を加へて七觀音とす其内にても千手十一面馬頭の三觀音八人の上にていへば支離ものにて五躰整ひたるハ正觀音に如意輪と我なり馬頭ハ豊前太夫が守り本尊にして豊後節を好み如意輪ハ常に頰杖を突て義太夫の太夫を守る千手觀音ハ虱の名に預るといへども京の清水に在て勢ひ盛んなりされども一言もなき親玉といふべきハ淺草の先生正觀音なるべし扱て千手觀音の盛久景清を助けしことハ佛なれば咎めもなれども悪逆なる平家に荷擔し源氏の世に逆てハ時節をわきまへぬといふものなり亦田村磨に頼まれ鈴鹿山の鬼神をたひらげし事田村の謡にてハ千手ひとり一の働きのやうなれども第一千手觀音とて手の一本あるといふハ偽りなり考へても見よ千本の手ハ指渡し一寸宛の細腕と見て一尺四方にすままなくはへても肩より腰のあたりまで幅一尺に長さ五尺にて左右千本なれども其透間なき事ハ淺州の市四万六千日の人よりも繁く動かすことなるべからず是を自在に働かせんにハ一尺間に一本宛も配りて後の方程長からずしてハ用立つべからずさあらば横腹にて幅一丈

れども幼稚ければ御心の儘にならざるを父の韋駄天見たまひて我上つけてえさせんとはるかに昇せ給ひしが面白しとやおぼしけん餘念なく空をながめ居給ふを宜折ぞと足疾鬼ハ舍利殿に忍び入なんなく舍利塔を奪ひ取天をさして登りけり韋駄天聞給ひて大いに怒り天をさして追欠給ひ忽地に追付たまへバ疾鬼も叶はじとや思ひけん舍利塔を下界に投捨けるを韋駄天見給ひて迅速に下界に下り舍利塔を拾ひ取て口にくはへながら道のほとりの大盤石をかるく指上給ひて又疾鬼が跡を追ひ行三十三天を追巡り給ふに流石の足疾鬼も足勞れて終に下界に落けるを韋駄天得たりと彼大盤石を投げ給ひしかバ疾鬼ハ甲州の打栗の如くたひらかに成て即死鬼とぞなりにける斯て韋駄天ハ口にくはへ給ひし舍利塔を開き見給ふに佛舍利ハましまさず扱ハ足疾鬼佛舍利をバ早く懷中に納めて塔のみを投捨我を欺きけるとて彼死骸の胸のあたりを探し見給ふに疾鬼が骨の微塵に碎けて血しほに染たるに交りて盆景の砂の如く覺ゆる物ハ是なん佛舍利にてこそあらめとハ思ひたまへども夫とも分らざりければ韋駄天も赤面し給ひしがさあらぬ体にて佛舍利もピツシヤリとこそ成にけれ

骨を折しも今ハ無駄天

とよみて天をさして登りたまひしとなん

【架蔵本・第五回「韋駄天の風揚げと足疾鬼」】金紙に「足疾鬼」「韋駄天」と墨書。

に長さ五丈も有べく後の方の手ハ長さ十間ばかりもなくて八用に立
べからず田村謡曲に一度放てバ千の矢先といふハ誤まりにて五百の
矢先と見ても一度に矢を番ひて放すことハ成しがたき事なり弓とノ
當り合ひ矢と矢と當り合ひ互ひに手が邪魔になりて矢番ひの門違
ひもあるべく取こぼし矢こぼれ売苦のみ多くして耳も頼も疵だらけ
となるべしされバ鈴鹿山へ届きたる矢ハ百本そこらもあるべけれど
鬼神に中たりたる矢ハ三十本も覺束なく數千騎に身を變じて山の如
くに見えたりといふ鬼にハさばかりの用にハ立ざりけらし何れ誠の
事にハあらず夫とハ違ひて我鐵砲ハ斯る目出度御代なれば日の本に
用ハなけれど天竺震旦等に軍ありて我佛力を頼むものあらバ我ハ二
本の手なれども大筒のこみ替を放さバ千手が千本の手にも負ハせま
じと思へり今ハ先小筒を修行せり鐵砲ハ中りのこまかなる物なれば
星をも打小鳥をも打なり木兎梟をなづけて置ハ小鳥を集むるため
なりと宣ふ男申けるハ佛の御身にて殺生を仕給ふハ如何なる事にや
普門品に觀音の妙智力の廣大なるを説たまへども殺生の事ハ見え侍
らずといへバ否とよ愛着の慈悲ハ達多の五逆に勝れ方便の殺生ハ
菩薩の六度に優れり普門品も皆方便なり方便ハ砲辯にて嘘を鐵砲と
いふも是なり故に佛法ハ佛説法ハ説砲なり諸佛菩薩ハ心に鐵砲を
納めて是を衆生に放たず我ハ鐵砲を顯ハして衆生の惑を解則ち我が
卓見なり遊女の誠なきハ價にハ依らずといへども高價の遊女ハ薄情を
顯はさず下價の遊女ハ自然薄情あらはるゝなり故に是を鐵砲見世と
いふ穴賢々々と宣ひしとなん

(をはり)

【架藏本・第六回「觀音の射的 木菟・梟・龍女」金紙に「觀音」と墨
書。先行研究が指摘するとおり、元禄三年（一六九〇）版『人倫訓蒙図彙』
卷二「鉄砲」が描くような武家の砲術習練のさまを用いるが、「戲画図卷」
ならではの面目は、やはり機智に富んだ取り合わせであろう。室町以降、
大流行した三十三間堂の通し矢を踏まえ、觀音の化にも譬えられる耳さ
とき木菟を添えるなどの趣向が楽しい。この場面は「鳥獸戲画」の兎の
賭弓が源泉である可能性も指摘されている（福岡市美術館展示図録『国
宝鳥獸戲画と愛らしき日本の美術』一八九頁、二〇二二年九月三日〜十
月十六日開催）。賭弓が正月十八日の宮廷の年中行事であり、十八日が
觀音の縁日であることを思い合わせれば、「鳥獸戲画」に根ざしつつも、
そこから觀音の寺であることを三十三間堂への連想はごく自然であつたといえ
よう。

三、喜三二「戲文十一帖」から

南新二の「寄書」は右の第六帖を以て終わるが、後半五帖を含む十一
帖分を持つ写本が複数伝存する。筑波大学図書館蔵「戲文十一帖」は表
紙に「戲文十一帖」と打付書、若干の異本注記があり、末尾に跋文を有
する（国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」より画像公
開。https://doi.org/10.20730/100000728。なお、見返しに「天保二年辛
卯潤月十三日／於御藏前書僧取得」と墨書）。国立公文書館蔵『墨海山筆』
百十一所収の「岡持狂文」は跋文を欠き、一部に破損も見られる。末尾□

□二己酉年三月上旬令寫之／梅處閑人」は嘉永二年（一八四九）であろう（<https://www.digitalarchives.go.jp/item/738642>）。国文研に紙焼本を所蔵。請求番号A12。http://dbrec.nijiac.jp/KTG_B_10002716)。東京国立博物館蔵「狂画賛」は徳川宗敬氏の寄贈本であり、同館デジタルライブラリーから画像が公開されている。朱の校訂注記がやや多く、筑波大学本系統の本文に拠って修正したと覚しき箇所や、誤記・脱文なども見られる（<https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/731;sessionid=0740f933627823734252CB5438DAE5AD>）。書名が異なる伝本はほかにも存在すると思われるが、今は筑波大学本によって本作の後半部分を架蔵本と照合してみる。

第七帖絵天黒天と愛宕山の天狗
太郎坊と木刀にて仕合ひ

天狗物もう大黒とうれ天ちと御頼申ます大黒様ハこなたで御座り
ますか大どなたで御ざります則私大黒で御座る天扱ハあなた
様で御座りますか私ハ愛宕山の太郎坊でござります私ハ兼て
鞍馬山の僧正坊門人で剣術の一流ハ極めましたれ共猶又こ
なた様のお太刀筋を拝見いたしました私及ませぬ所も
御座らば御門弟に相成たうて参じました天これハけし
からぬ私ハ剣術の師範ハ致ませぬ私ハ御不勝手な御方の
御頼なれば天ハア仕送りを被成ますか大イヤ仕送りでハなく
只福をお授け申が商賣で剣術の事ハ天イエく夫ハ仰ら
れますなおまへ様ハ軍の三天の御一人尤軍ハ無いめでたひ

御代なれど治世に乱を忘れずと申せば剣術のおたし
なみが無くてハ軍の三天とハ申されますまい大黒少しへこみなれどまけぬ氣にて
大さう空を云ハれてハ一言もない軍神の株もあれバまん
ざらでもないがしかし僧正坊で御修行被成たら随分ぞ
れで天イエくそこが修行の場で御座ります是非くお立
あひ下されませ大私ハ仕合ひとてハ致ませぬ太刀筋が見
たいとあれバ一日たりとも弟子に致て表十本の太刀を
おめにかけるが大黒流のたて、御座ります天左様ならば早
速御門弟に相成ませう御指南被下ませ此時鼠に云付て木
刀二本取よせる此所
芝居なれば袴のも、だちをとりたすきをかけ
うしろに鼓のはいる所なれ共兩人共夫に及はぬ出立也大申迄ハ御座らぬが
稽古にハ少しも自分の弓箭を出さず此方の詞に随て其通に
せねば成ませぬぞ天畏ました大サア立上つてかまへたり天
か様にかな大どうでもよしサア切出した天ヤットウ大そこをかう
拂うサア横に倒れたり天かやうにかな大サア此あばら骨をかう
ふむハ天アイタ、く大そこで首をかう切るじやサア其次ハ二本めも
又切出したたり天かやうに天そこを引込んで拂うハ其時膝を
つくじや天どちらのひざを大どちらでもよし天かやうに天そこで
又首を切るハサア三本めも又切出したたり天か様に大其太刀を
すくつて打落すハサア太刀を落したりく天太刀を捨ますか
大ハテ落されるのじや天ハイかやうに天そこで又首じや天とかく
首をお切被成ますの御丁寧なお流義で御座ります大一ト思ひ
じやかう切られる方でも仕合せだ扱四本めハずつと太刀を横の

方へ取てもぎどうに切かける[天]ヤットウ[大]そこをずつとはづして
かう首を切るじや扱五本めハ居風呂へはいる様に足を高く上
てまたくやうにしてしづむやうに下に居る[天]かやうに[大]それく

[天]つくばひますか[大]それく、そこを又首を切る[天]聞えました

[大]六本めハ木刀を腰へさす[天]かやうに[大]こちらでもさすハサアずつ

と来ておれが首をぬく様にするじや[天]かやうに[大]そこを跡へ

下つて太刀をぬくハぬかれてハならぬから跡へ下つてそちらでも

ぬいたり[天]かやうに[大]サア其ぬく内に首をきるじや[天]残念な

事で御座ります[大]七本めハおれハうしろをむいて居るから足

音のせぬ様にそつと来ておれを切る[天]かやうに[大]それく

[天]こ、で切ますか[大]そこを考て切られぬ内にこちらからかう首を

切る[天]扱あぶない太刀で御座ります[大]八本めハ俣をぐつと廣げ

るじや龍虎が氣取で成たけ廣げるじや[天]もう此上ハ廣がり

ませぬ[大]所を安くと首を切るハ[天]左様ありさうな事[大]九

本めハ初めから両方の膝を立ておれを切るじや[天]是でハ太刀

が届きかねます[大]そこをうしろへとつて[天]又首かな[大]サア

十本めハむつかしい又切出したり[天]ヤア[大]ハアと請るおれが太刀を

打落したり[天]かやうかな[大]其打落された手でそちらの太

刀を持た手をとらへて引たをすハサア前へのめつたりそこでそつ

首を押そつちの太刀をもぎ取て首を切る先ツ是が表十

本で御座る[天]扱格別な義で御座ります世上の劍術ハ師匠が

請太刀をして弟子に勝つ事を教ますがあなた様のハ弟子

に負る事をお教被成ます定めて太刀の名が御座りませう

[大]太刀の名ハ御座らぬが大畧に覚る詞が御座る大畧といふ

事ハ一にあばらをおまへて二に引出拂ふて三に太刀をすくつて

四ツ横からもぎどうに五ツ湯風呂の如くに六ツ首をぬくやうに

七ツ足音ないやうに八ツみしきを廣げて九ツこむらをつつ

立て十ツでそつ首押へた天狗あきれたる[天]扱結構なお流義

と見えましたが中々私式の手に乗ますお流義でハ御座り

ませぬ折角御指南下されましたれ共お断申上ます

すぐくおいとま申上ますと出てゆく大黒無言 面目ないを見さいな

く
【架蔵本・第七回「大黒と天狗の劍術」金紙に「大黒」「太郎坊」と墨書、

天狗名までが喜三二の文章と一致する。「大黒舞」の歌謡を用いた一篇。

第八帖繪 鷺風の神を

いで羽なる平鹿のミたか立帰り親の為にハ鷺をとりけりと

よみし其鷺の子親鷺の鷹にとられしを無念に思ひ

平鹿の郡に行つてつけねろふといへども更にめぐりあはず

頃は水無月の炎暑の時なりしが此鷺飢につかれて食を

求れども鳥獸にも逢ハざりけるに遙むかひの山影影に物

影の見ゆるを人か獸かと一さんに羽うちて行て見れば

人なりけるゆへ少しためらひしが猶飛か、らんと勢ひなるを見て

其男いふやう我ハ武州湖江領花又村に住む鷺大明神の氏

子也汝我をくらハゞたち所に明神の御罪を蒙るへしといへば

鷲が曰爰ハ羽州平鹿の郡也花又村の人といふハ此場を遁ん

との偽ならんと云に汝猶も疑ふか酉の町の氏子の印にハ我

二つの頭の竿を持たりいよゞ疑はゞ神徳を見しらすべしとて

南無や鷲大明神氏神の奇瑞を見せ給へといふより一むら

の雲たちまちに起りて鷲が上に覆ひ掛りて飛去るべき

やうなし又鷲が足に障る物有これまさに頭の竿なる

べし明神の咎め疑ひなしと思ひければ此上ハ何か疑奉らん

素より御氏子を服する心更になしゆるし給へゞといふ詞の

下より雲晴わたりてもとの如し男ハ足早に林の内へ入り

ながら我ハ狸也危き場を通れんために汝を化かせし也

一片の雲と覺しハわかハ畳敷の陰囊也二つの頭の竿と

覺しハ則我が鞆丸也化かされたるこそいた鷲けれど秀句

など云て吹ければ鷲ハ大に背嚙をなして林の内に追かけ

しが枝葉繁りて羽を痛むれば入べきやうなし夫より

いかにもして先此狸をとらへ引裂喰ハんと林のあたりを

飛めぐりしが弥飢に勞れければ力なく川邊におりたちて水を

はみ居たり此時風の神ハ天帝の命を蒙り此程風無く

て殊更嚴暑に苦しむもの多ければ涼風をあまねく

吹かすべし尤大風ハ吹かす事なかれと有しを守りて風袋

より少ヅ、風を出して過行けるをさればこそ彼狸陰囊

を大にして空を飛びめぐると見えたり一掴につかみ裂んと

飛かゝりて風の神の額に爪を立てかきさばけば風の神

ハ肝をけし何ものにとふり返るに汝我を欺たる其陰

囊より引裂んと風袋へ爪を立てさつと裂ければ夥し

く仕込ミたる風一さんに吹出たり鷲ハ此大風に吹飛ばされて

海邊をさして行けり沖にてハ思ひもよらぬ早手の吹来り

ぬとて舩々ハ辛きめにあふものすくなからず風の神ハ漸

心定りて空袋をかづきて早く天に帰て此事を天帝に

奏せんと思ふに額の疵甚痛出ていそぎて帰る事叶

はずそろゞと登りける跡より雷神来りて今帰り給ふや

我もけふ少斗鳴りて帰る也つれ立て帰るべしといふ風神

いふ我早くハ行がたし先へ行給へといふ雷神其故を問ひ

ければ風神の曰わしが遅ひハ全躰鷲のかけしひたひ

の疵よりぞとうたひぶらりしやらりとぞ登ける

【架蔵本・第八回「鷲にさらわれる風神」】人名等なし。白鷲と風神。『藻

塩草』『慶長見聞集』等に所見の一首「出羽なる平賀のみたかたち帰り

親のためには驚もとるなり」から書き起こされる一篇。

第九帖 福祿壽盪に乗て龍を釣上たり其
松頭ハ海老也龍龜と榮螺付て居る

福祿壽ハ南極星也南極ハ北極に對する星なれハ日本

の地よりハ見えす南極星も日本の地を見給ふ事無

けれバある時天人のあまの羽衣を借りて雲路を下り

日本の地を遊覽し給ふ駿州三穂の松原の景色に

めで、此地にあま下り羽衣ハ松の枝に掛けて磯邊をめぐり
見給ふうち講釈師伯龍其羽衣を拾ひて家の宝と

す南極星ハ再天上ニ帰ることかなはず是非なく松の下に

数月を送り給ひしがいつ迄まつしたに足をとゞめんやとて

武蔵国橋場に下り荻江の門に入て長うたの藝者と

なり藤吉と名乗給ふ苗字ハ其迄松の下に住給ひしゆゑ

木下とつき給ひしが後秀吉と改名ありて人皆橋場

の秀吉とぞ云ける秀きちも女藝者めきて御あたま

にハ似げなかりけれバ又改名ありて呂尚と名のり給ふ

此時長唄ハやめて索頭持をし給ひしが呂尚も七軒の

近江屋の亭主が假名に紛らハしけれバ人皆索頭坊

くくと云り其又外の索頭持の坊主に紛ハしかりける故

御頭の長きに思ひよりてたいこうぼうくと延て呼けるが

通りて茶屋船宿などハたいこう様くと云けり色々

名を替給へども天上の御生れにて下界の事にハ疎かりけ

れバ索頭持もはやり給はず後ハ釣をたれてたのしミと

し給ふ此時市川白猿これも親玉株のミにて人の請おも

ハしからぬ時なりしに福祿壽のたまハく道おこな

ハれずたらひに乗て海に浮まん我に従はんものハそ

れ蝦かとなりしに蝦これを聞て悦ひしが人目を

いとひて姿海老屋の暖簾を身にまとひ船頭と成て

福祿壽と共に海に出る此時水底にて俄じやくと云声

ありて蛸と榮螺うかみ出耀の後へひつたりと付ける故蝦

なんだくと云けれバ蛸と榮螺声を揃へて両公盪く

ださゝえあハびらゝりとうといふ時又うなぎでもなくさより

でもなき長き肴おどり出て又引込む又なんだくと云ければ

榮螺と蛸がさんまさうに御座りますと云けりこゝ、ハ手を打

場なりとて白猿シヤンくと打ければ榮螺と蛸背中をこ

すり合てがちくと打て水底に入りけり福祿壽釣を

たれ給ふ計に龍かゝりて上りけりこれも通り茶番なる

べしとて又なんだくと云ければ難陀龍王とそ答けり

白猿なんだ龍王ハあんまり手がないと笑ければ龍甚

怒りをなして一時に水を巻上げ江戸の方を過て雨

をふらせければ福祿壽ハ田ばたの西行庵の庭へ落され

給ひ白猿ハ向嶋へ落されけりたらひハ何方へ落しや其

行末を知らず龍はお蔵前に下りて道のほとりなる

建立のつきがねの龍頭を見て我子と心得近よりて見

れバ鐘なる故又腹を立龍頭をくハへ七まとひ纏ひて

尾にてたゝけば鐘ハ湯と成て流る龍も此湯にて忽

身焼けたゞれて空くなる嵩谷といふ人此所に来かゝりて

小脇指を以て龍をつたゞに切る夫より嵩谷を屠龍

翁とも云へり龍のちりけもとより奇なる骨出たり是

を龍の三ツ道具といふ管弦馨泗濱石面向不背の玉

これなりとぞ

【架蔵本・第九回「福祿寿の竜釣り」】金紙に「福鹿壽」と墨書。壺の舟
で櫂を操る海老、櫂に付く榮螺と鮑、釣り上げられる龍。

第十條 〔繪〕 普賢菩薩象にのり川に入象の
牙へ箒をゆひつけ鵜をつかひ給ふ

いにしへ岩落鵜飼の謡にハ他国の物語とありて所ハ
しれず甲斐の国にてハあらずと見へたりといふ所ハかみ

しも三里が程は殺生禁断の所なるに其あたりに鵜つかひ

多く有てよなく此川に忍登りて鵜を遣ふなるを所の

若もの共聞付て憎きふるまひいかにも見頭ハして後

代の見せしめにせんとてねろふとハ夢にも知らずある闇き

夜に辰之助といへる鵜つかひ川下より忍ひ上りて鵜をつか

ひけるを川下の方よりさればこそ曲ものよ遁すなとて

追ひ来る辰之助恐をなして鵜ハ籠に納けるが箒火

は消す隙もなくて大汗を流し命限りに押登るむ

かひより舟一艘来りしがうるハしき声にて辰之助なる

やさばかり急ぎて遁れんとする共川上よりも鵜つかひ

をとらへんとて舟の来るなれば漕登るとものがるへからず

早く其鵜籠も箒も取得たる鮎をも我舩へうつしてさあ

らぬ舩にて漕下して帰るへしと也箒の火影に見れば

いとあてやかなる女也君ハ誰人にてましませバかく我を憐

給ふと問ふ間も心せきければ只忝しとて見咎められん

物ハ皆彼舟に取入て又川下に漕下しけるに追手のふね

来りてあやしみとゞめて舟底迄をも改けれ共怪き事

なかりければ疑ひなしとて通しけり辰之助ハ心のうち嬉しく

ハ覚しかどよしなき人に逢て時をうつせしなどつぶやきて

帰りぬ追人の舟ハ猶川上にこそ居つらめと漕行くに鵜

遣ふ舟有さればこそとて罵りける折しも川上なる追人

の舟も漕下りてかみしもにさしはさみて大法を犯せる

ことをいましめかれを殺せよふしづけにせよ杯云に鵜舟

なる女のいふ爰ハ殺生禁断の所とも知らざりき向後の事

ハ心うべしゆるしてよといへども口くくに云罵りて助んといふ

もの一人もなし女いふ汝等ハ慈悲の心無きもの共哉かく

理りをのぶるを聞入がたくハいかにも心の儘にせよ後の世

にこそ思ひ合ハすべけれといふに初めて顔を見やればいと

美しくミやびやかなる事云はんかたなし此時風靜に

箒火真直に立登りたるが火影いと明らかにしてあてやかなる

顔のあらハに見えけるに皆くうつゝなく見やるのみ也けりふし

ぎなる哉此女たちまち普賢菩薩とあらハれ給ひ其舩

ハ白き象と變じて川の中に立てるに仏舩ハ則象に

乗てまします也今迄あらけなく云し舟のもの共奇

異の思ひをなし只御顔ばせのうつくしきを見て心そゞ

ろに手を合せて 路考文車 錦車杜若 路暁

玉川 里陽撰子と四句の文をとなへて拝するもあり

又ハ 炎玉松葉 五明丁子 兵庫鶴樓 每屋

中三と四句の喝を唱へて拝するも有此時菩薩のたま

かくいかに汝等これなる籥と鶉と鮎ハわが守り子の鶉つかひ
辰之助といふものに慥ニ渡すべしもし悪心を發し辰
之助を責るものならば汝等が願望ハ何事もきくまじき
ぞとて少しゑみをふくみ給ひてこぼれかゝる御目にて尻
目ににらみ給へば皆々心ときめきし詞を揃へて何ぞ
おまへとぞ云ける

【架藏本・第十回「普賢菩薩の鶉飼」】金紙に「普賢菩薩」と墨書。鮎も添えて鶉飼のさまを描く。

第十一帖 繪 狸々酒呑童子丸惠遠禪師牛若丹慶
小野小町西行法師お徳女さかもりの所

いずれの御時にや有けん彼大酒に名を得たる狸々なるもの
日本に渡りて大宴を催しこと有其趣は其時世上に弘め
し口上書を見て知べし此配りは朱唐紙に摺て赤
き紋唐紙の帯也

仲秋癸酉日於三爛田連酌街酩酊樓一催一終

日終夜大宴一各傾二數杯一遂以レ倒二臥其席一

可二取レ杯度一名云二酒臥會一當日自二早天一四方酒

君子携二詩歌連俳狂咏等一不レ論二晴雨一枉二玉

賀一以得レ盡二酒興一幸甚

○太宰帥大伴卿大人讚酒之詠十三首加表

装為十三軸當日懸席上以鬪可呈一座諸

君當日出席大概

廬山惠遠禪師 酒呑童子大人

柿本人麻呂大人 武藏坊辨慶大人

酒田公時先生 地黄坊樽次先生

大師河原大蛇先生

酒永元年 茨木童子

癸酉八月 席上補助 叶福助

會主 尋陽山人狸々

此日出席ハ惠遠禪師柿本人麻呂酒呑童子ハお徳といふ
藝者を連て出席也武藏坊丹慶ハかゝる席をも御覽
あるべき事也とて主君牛若丸を忍姿に出立たせ御供
して来れり酒田の公時ハ此時はや大江山退治の御内意
ありし頃なりければ童子へ對面を憚りて病ひと称し
て不參ありき地黄坊も大蛇先生もいかなる障にや出ざ
りけり世話人も茨木のミ出て福助ハ出ず此引札普く配
りけれ共たれくも聞怖して出席なしいかなる心にや
有けん西行法師下戸なれ共出席有手柄岡持ハ出たり
といふ人ありしが大下戸なれば勝手に隠れ居たるや席上
へハ出ざりけり各携來る詠草左の如し

足曳の山鳥の尾のしたり尾の長くし夜をのミあかせるかも 人丸

なみくくと満照る月の盃は今やむさしがはらに入らん 武藏坊

鞍馬山の花の春過夏暮て照るさかつきの秋にあふかな 牛若丸

子静淵明笑幾年 虎溪間月有誰憐

不圖今日扶桑地 獨侍狸々子會筵

右懷故郷作 廬山釈惠遠

千升の酒の瀧のミ大江山いくのちの世も名に響くらん 酒呑童子

西行ハいかなる旅もして見たが酒の呑みくらこれがはじめて 西行

竹葉に顔はづかしき月夜かな 徳女

ちと聞えかねたる發句也年の市に賣るお福の面の心歎

芦の葉と波を藝者の笛鼓打寄てのむ酒そたのしき 會主 狸々

此外出席一向に無かりければ會主ハ内心大ふさぎにて誰にてもあれ

来れかしと思ふ折からいと見苦しく乞丐と覺しき百とせの姥

申にさしたる餅を手に持て近くす、み来れり弁慶見咎めて

かゝる拙き身にて何とて此雅筵にハ近つきたるぞ殊に手に持た

るハ餅と見えたり旁不敬なりと罵りければ彼老姥

しら波の名おもいとはでのむ酒に餅ハ何かハくるしかるへき

童子いふいかにも盗人上戸ならば餅もゆるすべし無下に帰すべきに

あらずいざ一つのむべし先汝が名ハ何と云ぞと問へば我ハ小野の

小町がなれる果也我に酒をのませ給ハ一斗入の盃にて只一ツ

のませ給へ御會主の一斗のみ給ふを見て後飲べしといふ狸々が曰

我一斗の酒をなど恐るべきや速にのみて見すべしといふに小町が

いふもとより安かるべし去ながら我望有一合入の盃にて百

はいのミ給ふべしこれ一斗也我後我ハ一斗を速に吞んと云

狸々猶安き事也とて一合入にて頬に酌て九十九はいのミ

今一杯と成けるがあな苦しめまひや胸苦しやと倒れければ

座中皆介抱して老姥を侮りたるハ會主の大なる不覺なり

とて不覺さの狸々とぞ笑ひける人に強てのまする時ハしひ

の狸々とも云ならんかし小町ハ會主の躰を見てとても跡の

一つハ呑給ハじとて一斗入になみくゝと受て息をもつかて

ほしければ人皆恐にけり其後酒酣にして互にしひければ人

丸八面に朱をそゝぎたる如く酔て

樽ぬきの柿のもとなる我をしも顔赤人と見るべかりける

既に一樽のミ仕舞て新樽の口を明る時茨木童子

初樽の鏡をぬかば先のまんもとより鬼の役目なる物

と云つて一つのミけるが酒呑童子にむかひてこれハ初めのとハ口た

がへり何印とか呑給ふとてす、めければ酒呑童子一つのミて

心あてにのまはやのまん初樽の口まどハせるしら菊の酒

と云ければ茨木童子すみやかに

ふる哥を仕立直せしお小袖は童子格子の躬恒なるへし

いづれも興に入て此たびハ西行にす、めけるに西行ことわりていふ我

憲清たりし時ハ呑たれ共今ハやめたればゆるし給へといふに小町

いつはりやこ、もとなればしひもしつさりとしてハ又やめましたとハ

西行言下に

餅を喰ふ時ハ甘乞ひ小町にてのちハ生酔小町なりけり

お徳女に猶のませよと皆々云ければはやゆるし給へといふにさらば

即興の發句有へしさらばゆるすへしと座中皆云ければお徳女

秋の夜や風に吹かれてゐるわいな

大酔の意言外にあるを皆感じてゆるしけりかくて會主が心の如く呑酔臥て正躰なかりける時會主狸々漸起上りてはや夜も明けなんとす我望かなへりとして扇を廣げて立上りよも尽じくと獨吟にて諷ふ声に皆々めをさまし起上りて同音にさむると思へば泉ハ其ま、尽せぬ宿こそめでたけれと諷納めければ夜もしらくと明け渡りぬ此時手がらのをか持初めて出席に出て先巻物ハ是きりてござり万壽

跋

今認見候得共何も跋に書候事も無御座候扱々長たらしき面白からぬ事を認恐入奉て物好者の髮結ひの如く関取の禪かつきの如く大神楽の挟箱持の如く御藏の御巻物へ附て巡り候事と相見候へハまさか末の世迄反故にも成申間敷と萬に汗顔の仕合哉去是は月成か書し物よと年経て後も被思召出可被下哉と是而已書散仕候也

平澤平角

(花押)

田代新左衛門様

玉案下

【架藏本 第十一回「酒吞童子の宴」】金紙の墨書「武藏坊弁慶」「うし若」「猩々」「人丸」「惠遠法師」「西行」「小野小町」「おとく女」「酒吞童子」

は戯文の出席者と合致する。とくに「お徳女」の名が架藏本の「おとく女」と一致することは目を引く。「戯画図巻」諸本は必ずしも登場者名を画中に書き込むとは限らず、人物比定には揺れが生じやすい(注1拙稿)。その中で十一帖すべての登場者が架藏本と一致することは、喜三二人名を明記した「戯画図巻」に拠って戯文を作した証左に他ならず、その配列までもが架藏本と合致する点は注目される。現段階で知られる「戯画図巻」諸本のうち、この配列を持つ伝本は架藏本のみである。

なお、先掲「読売新聞」所載の「序」には第八帖の記載がないが、筑波大学本には「第七帖もしやれ本おとし咄の趣也第八帖も又落し咄の趣に書とゞめたり第九帖ハまことにうつ、なき絵、さうしの趣をしるす」とあり、近似する文章が連続する。墨海山筆本・東博本、静嘉堂文庫本も同様の序を持つ。従って、南新二が紹介した「序」は、南自身または原本そのものに目移りによる脱落が生じていた可能性が高いと思われる。

四、南新二と倉田幽谷

南新二の「寄書」は、幕末明治期に至るまで「戯画図巻」が受容されていた一証として貴重である。そもそも、なぜ南がこのような作品に関心を寄せたのか、その人となりについて概観しておきたい。

南は天保六年(一八三五)生、明治二十九年(一八九六)没。『南新二輕妙集』所載の「南新二小傳」(靱山書店、明治四十年)によれば、姓は谷村、幼名、陽之助、後に春育、三育と改めた。代々、徳川幕府の

御教寄屋坊主を務める家柄であったが、幕府瓦解の後は回漕会社や通運会社にも一時籍を置いた。しかし、久しからずして退社し、南新二の仮名によって「読売新聞」や「東京絵入新聞」に投書を重ね、文名を得たという。

とりわけ注目されるのは、南は喜三二に私淑し、東喜三二とも号したという逸話である。

△翁は喜三二に私淑し後には東喜三二の號をさへ用ゐられたり。筆の洒落なるは此の一事を以ても推するに難からず。或時饗庭篁村氏翁に語るに君は喜三二を宗とせらると思ふ由を以てせしに、翁もミツかりましたナと笑はれたりといふ。(饗庭篁村氏文中所意)

(『南新二輕妙集』「南新二小傳」)

そうであつてみれば、喜三二に傾倒した南が先掲の狂文狂歌を所持し、さらに「読売新聞」へ稿を寄せて、残る五帖のありかを探索したというのも有り得べき展開といえようか。

南をめぐつては吉田香雨『当世作者評判記』(大華堂、明治二十四年)にも評が載り、

君は有名の通人なり今の新聞記者及び小説家中その通を角べんには君が憤鼻禪をだも擔ぐべきものあらずといふ又君は劇仙なり芝居一道のことに掛けては當時肩を並ぶるもの少なかるべし(中略)君

又茶番が得意なり故にその小説は兎角滑稽解頤的の調子に流れその洒落は例も茶番的古臭味を帯びざるハなし左れば其洒落は古風なり當世とは言ふべからず其滑稽は時代なり(中略)蓋し君は小説家と云はんよりは寧ろ新聞の雑報家劇評家などいふ方穩當ならめざるにても亦君は明治文廊の一通士なるかな (『当世作者評判記』)

という。「劇仙」とも評された南の一面は、先出の孔明と一寸法師の応酬に対して加えた評にもよく現れている。

他方、南新二の「寄書」を記録した倉田についても見ておきたい。倉田は「寄書」の全文のあとに二字下げで、

施報(注、倉田の諱)いふ。此翁か風雅に心酔へるは。あまねく世のしる所なるに。其かきさまの。うきていやしける處あるハ。世のさま。人の心を。うかてるなるへし。(『筐底雜誌』)

と記し、この話題を閉じている。喜三二の作風に比して、南の「寄書」に「うきていやしき處」を見出し、いささかの違和感を書きつけている点が倉田の感性を伝えて興味深い。

倉田は文政十年(一八二七)生、明治三十三年(一九〇〇)没、幕末明治期の儒者であった。本姓は立見、諱は施報、字は務卿、通称は直八。江戸において安井息軒に師事し、はじめ幽谷と号した。息軒の推薦を得て昌平黌に学び、和歌や書画もよくし、息軒の私塾「三計塾」の最後の

塾頭も務めたという。佐倉藩の藩校成徳書院で教鞭をとったが執政老臣との軋轢により藩を去り、務と改名して信毛の間を客遊、上野国吉井藩の吉井英明公に招かれる。

安定した生活もつかの間、世は明治維新を迎える。『筐底雜誌』の出版にも尽力した弟子、中村忠誠はいう。「法を泰西に取り、儒術を東閣す（明治更始。取法泰西。東閣儒術）」、権力に伝のない者やそれに拠ることを潔しとしない者は陋巷に彷徨し、措躬に處なしという状況に陥った（而其不遇者。彷徨陋巷。踟躕窮廬。飢寒困頓。殆無處乎措躬。儒者窮達相懸。於時為甚）。倉田もまた例外ではなく、廢藩の後は東京に戻り、埼玉の師範学校に職を得たものの、学制の改変などを経てところを得ないままに生涯を閉じた。峭直にして義を重んじた師は時俗に徇わず、ために世に容れられることなく、学を蓄え文を懐にして窮陋に終わったのであると、中村は慨嘆する（先生峭直重義（中略）不枉己徇人。是以不為世所容。介特無援。畜學懷文。而終於窮陋。悲夫）（中村忠誠「先師倉田倉田先生行述」『抱樸園文存』下。倉田武夫。大正五年¹⁰）。

南新二と倉田幽谷と、やや対照的な側面を有しつつも「戯画図巻」に注目したのは、喜三二の名によるところが大きかったであろう。

しかし、その源流が秋田藩における人的交流に発するものであったことは、たとえば、福岡市美術館や國學院大學図書館に所蔵される『異代同戯図巻』が福岡藩の御用絵師を務めた狩野昌運（寛永十四・一六三七（元禄十五・一七〇二年）の手になったように、「戯画図巻」という作品がそもそも大名家のネットワークの埒内で制作享受されたことを意味す

る。このことは本作の特質として注視しておかなければならない。

五、結びにかえて

「戯画図巻」は文学のみならず、絵画・芸能・風俗などさまざまな要素の交錯点として存在する。登場者はそれぞれのコンテクストを有しながら巧みな機智と趣向によって結び合わされ、異代同戯の楽土を描き出す。

たとえば、福岡市美術館蔵『異代同戯図巻』第四図「狐の勅使と蛤を焼く懶瓚」は中国唐の名僧懶瓚の故事を用いて、皇帝の使いが来ても芋を焼くばかりで答えなかったという懶瓚に蛤を焼かせ、狐の勅使がその背後に恭しく佇むさまを描く。本来の故事は禅画ともなり、狩野派の画論『後素集』にも採られてよく知られたものであったが、それが蛤に変えられたのは、『日本霊異記』中巻「力女拵」力試縁第四」や『今昔物語集』巻第二十三「尾張国女伏美濃狐語第十七」などに語られた「美濃狐」の説話を踏まえた趣向であつたろう。狐の血を引く強力な女「美濃狐」が悪行を繰り返すため、尾張の強力な女が「蛤売り」に化けて懲らしめたという強力説話から、狐と蛤の連想が活かされたわけである。「戯画図巻」の生命は、このようなコンテクストの重層性・多面性にあるといってもよい。

加えて、各伝本がどのような鑑賞体験を引き出したかという問題も当然、視野に入れねばならない。その意味でも、本稿が取り上げた喜三二

の狂文制作や南新二、倉田幽谷らの営為は重要である。

事新しく述べるまでもなく、古典文芸は先行作の連鎖の中に形づくられる一面を有するが、「戯画図巻」の場合は先行の絵巻等を利用した例も少なくない。とくに『鳥獣戯画』は通奏低音のように随所にその要素がちりばめられており、『鳥獣戯画』が古典教養として定着していたことを思わせる。秋の野で繰り広げられる「蛙の舞楽」にしても「鳥獣戯画」を源流とした痕跡が濃厚であるが、やがて異類異形の闊歩する舞台装置として機能するようになった「秋の野」のありかたを今一度、検証する必要がある。とくに喜三二の狂文ではその野が紫野と今宮に指定されている点、『付喪神絵巻』の物語世界とも繋がる地名であり、土地の記憶の反映を視野に入れて今後検討を進めたい。

狩野派内における先行絵巻の摂取として注視されるのは、狩野元信（文明八・四七六～永祿二・一五五九）筆の『酒呑童子絵巻』と『酒飯論絵巻』である。酒呑童子が片膝を立て、頼光たちとの酒宴を楽しむ場面は、崇福寺蔵『付喪神絵巻』（十六世紀）の妖怪の宴に用いられるなど一つの型として定着したが、「戯画図巻」の諸本もまた、これと同様の挙措の童子を描き添えて長尺の酒宴の場面を構成し、作品に華やぎを与えている。参考図版に③⑦福岡市美術館蔵『異代同戯図巻』と④サントリ―美術館蔵『酒伝童子絵巻』、また、⑤⑥『酒飯論絵巻』は元信本と同系統のフランス国立図書館本を挙げた。『酒飯論絵巻』は『酒伝童子絵巻』との親近性がすでに指摘されており、⑤の画面中央に座す朱の衣装の男性の挙措が酒呑童子に似る。⑤『酒飯論絵巻』の右端で額に手を当てる

僧侶は③『異代同戯図巻』の同位置の人丸に近しく、⑤の左端で二人の男が酒を準備するさまも③の小鬼を彷彿させる。⑥『酒飯論絵巻』で山盛りの飯に前屈みになるずんぐりした僧侶の姿は③『異代同戯図巻』の恵遠法師に近い。⑥の構図も、⑦において左の小部屋で茶を点てるそれと似通う。茶は別室で点てるのが慣習ではあるが、「戯画図巻」が詩歌合の場面に稚児、すなわち「牛若」を描き添える着想をこうした図様が誘った可能性もあろう。

狩野元信筆の絵巻は狩野派の絵師たちに熱心に学ばれた。現存する「戯画図巻」の最も古い本画『異代同戯図巻』を手がけた昌運もその一人。昌運描く『酒呑童子絵巻』（フリーア美術館蔵）は元信絵巻を忠実に学んだ優品として知られる¹⁾。こうした狩野派内の画学と画題の継受は「戯画図巻」の誕生に複層的に影響を及ぼしながら、その豊かな表象世界を形成し、やがて俳諧連歌とも結んで新たな文芸を形づくっていったのであった。

総じて「戯画図巻」をめぐるのは、このような作品が生成・愛玩された時代性を読み解いてゆく視点が重要である。その中には朋誠堂喜三二や田代尚亭、南新二、そして倉田幽谷らも座を占めている。「戯画図巻」の長い愛好の諸相と、そこに共有される知のすがたは、なお深く広い。

〔注〕

（1）拙稿「十七世紀狩野派の「戯画図巻」―諸本と点描―」（『調査研究報告』42、国文学研究資料館、二〇二二年三月）参照。

(2) 架蔵本の簡易書誌は注1拙稿にも収録、以下のとおりである。

伝狩野周信筆。一卷。縦二六・六×横六八・三・七cm。

表紙 絹、向かい鶴等の織出。

外題等 表紙に金紙を貼付するが書名なし。箱に墨書紙片

「土佐光信狂画図 周信之写」を貼付。

見返し 金切箔を散らす。

寸法 表紙一六・四cm、見返し一六・七cm、第1紙三八・二cm、
第2紙三八・四cm（以上第一図）、第3紙三八・〇cm（第二図）、
第4紙一八・五cm、第5紙三八・四cm、第6紙三八・四cm（以上
第三図）、第7紙三八・三cm（第四図）、第8紙三八・二cm（第五図）、
第9紙三八・三cm、第10紙三八・二cm、第11紙三八・五cm（以上
第六図）、第12紙三八・〇cm（第七図）、第13紙三八・五cm（第八
図）、第14紙一九・〇cm、第15紙三八・一cm（以上第九図）、第16
紙一九・三cm、第17紙三八・四cm（以上第十図）、第18紙三八・三cm、
第19紙三六・〇cm（以上第十一図）。

備考 画中に人物名を墨書した金紙を貼付。卷末「此一巻土佐光

信狂画圖／周信寫（落款「如川齋」寸法1.8×1.8釐）。

(3) 本書の閲覧に際しては同文庫の吉田恵理氏、山田正樹氏より格別
のご高配を賜った。なお、本稿脱稿後、吉田氏より池田和彦「南
新二・投書の結局―明治十七年から二十年へ―」（『成城國文学論集』
43、二〇二一年三月）についてご教示を賜った。

(4) 各場面の読解についての先行研究に石田佳也「御用絵師の戯画

狩野昌運筆「異代同戯図卷」について」（『サントリ―美術館論集』6、
二〇〇二年五月）、加藤祥平「狩野探幽周辺の戯画製作について―
徳川美術館本を中心に―」（『金鯢叢書』44、二〇一七年三月）等が
ある。注1拙稿参照。

(5) 名古屋市博物館「もしも猫展」（二〇二二年七月二日～八月二一日
開催）。図録に「化け猫草子絵卷」の全図が載る。本稿の参考図版
は同図録から引用させて頂き、掲載については名古屋博物館の
津田卓子氏に格別のご高配を賜った。なお、化け猫が自らの化け
姿を水鏡で確認する場面は、『十二類絵卷』の狸の鬼が水鏡を覗き
込む場面を想起させ、これも一つの定型となっていたことを思わ
せる。

(6) 拙稿「故事を遊ぶ―「戯画図卷」という文芸」（『古典の未来学』
文学通信、二〇二〇年一〇月）参照。

(7) 福岡市美術館の同展示では同館蔵『異代同戯図卷』と國學院大學
図書館蔵『異代同戯図』の初の再会展示も実現された。両巻がツ
レであることを指摘した注1拙稿がささやかな機縁となったもの
で、展示の実現に向けてご尽力下さった福岡市美術館の宮田太樹
氏と國學院大學図書館の生形恭子氏に御礼申し上げます。

(8) 渡辺守邦『仮名草子の基底』（勉誠社、一九八六年）など参照。

(9) 中込重明「根岸派と洒落ル会」（『日本文学誌要』63、法政大学、
二〇〇一年三月）など参照。池田一彦「南新二・投書の粗描―明
治十五、十六年―」（『成城國文学論集』27、二〇〇一年三月）は「東

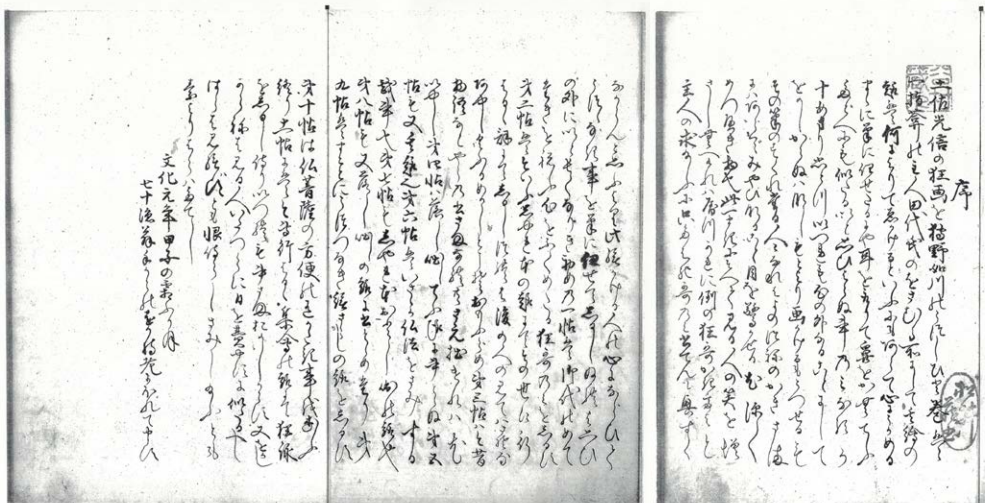
京絵入新聞」等の投書活動から、創作の完成度や発想の奇抜さ等を論ずる。

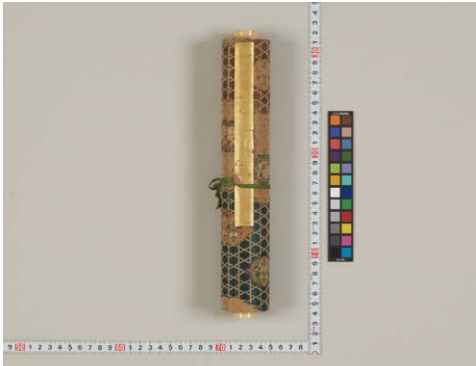
- (10) 町田三郎「息軒遺事―倉田幽谷『抱樸園文存』から―」（『九州中國學會報』36、一九九八年五月）、同「江戸の漢学者たち」（研文出版、一九九八年）、小宮厚・町田三郎『松崎謙堂・安井息軒』（明徳出版社、二〇一六年）、芳賀明子「第二代埼玉県令白根多助をめぐる漢学ネットワーカー―県官の詩文集（麗和吟社・笹田黙介・川島棟坪・木原老谷・早川藍澳・溝口桂巖）と白根県令関連碑文から―」（『文書館紀要』29、埼玉県立文書館、二〇一六年三月）など参照。

- (11) 龍澤彩「狩野昌運筆 酒吞童子絵巻」（『國華』一五二二号、二〇二二年八月）。なお、フランス国立図書館蔵『酒飯論絵巻』については『酒飯論絵巻』影印と研究 文化庁本・フランス国立図書館本とその周辺（臨川書店、二〇一五年）など参照。

〔付記〕 本稿は科学研究費補助金・基盤研究（B）課題番号20H01238「中近世日本の画題生成における明代出版文化の受容と展開に関する総合的研究」の研究成果である。

貴重な画像の掲載をご許可賜りました静嘉堂文庫、名古屋市博物館、福岡市美術館、サントリー美術館に御礼申し上げます。





卷姿



箱



表紙



第1図 「鼠の正月風景」「猿と猫の萬歳」

複数の諸本冒頭に描かれる祝言の図様。構図はスペンサー・コレクション蔵『鼠草紙出世物語』（通行書名『弥兵衛鼠』）のそれを用い、同物語の登場者たちを描く。

<https://digitalcollections.nypl.org/items/9bf4fd1f-09ec-1a69-e040-e00a18060240>



第2図 「諸葛孔明と一寸法師の曲芸」

孔明は古来、武人の尊敬を集めた人物であることから、作品の享受層が武家であることを窺わせる図様とされる。孔明は「枕の曲梯子」、一寸法師は「あやとり」「弄丸」の曲芸を披露する。



第3図 「蛙の舞楽」

秋の野で舞楽を奏する蛙たち。琴を演奏する姫蛙の姿も見える。複数の諸本が描く「狸」はここには見えない。周信筆の大英博物館蔵「戯画図巻」はこれとは大きく図様が異なる（後出、参考図版）。



第4図 「文覚と弘法の足相撲、時宗の行司」

足相撲に興ずる文覚と弘法大師。いずれも神護寺の再建に関わった人物の取り合わせとされる。



第5図 「草駄天の凧揚げと足疾鬼」

凧揚げに夢中になる草駄天と、その隙を狙い、舍利塔を盗み出す足疾鬼が描かれる。



第6図 「観音の射的 木菟・梟・龍女」

観音が砲術の腕前を披露する。的場には木菟と梟とが描かれる。諸本は木菟のみを描く伝本と、木菟と梟を対で描く伝本が存する。

喜三二の戯文に関する南の記録はこの帖で終わる。



第7図 「大黒と天狗の剣術」

大黒と太郎坊天狗の剣術の勝負。國學院大學図書館本は冒頭にこの場面を配置するほか、徳川美術館本（粉本）、ギメ美術館本等も同様の図を有する。



第8図 「鷺にさらわれる風神」

ギメ美術館本はこれを下巻冒頭におき、鷺の行く手に富士山と富士の人穴、仁田四郎と思しき武士を描く。諺「一富士二鷹三茄子」の絵画化で「鼠の正月風景」と対で制作された可能性がある。なお、この諺は宝暦9年（1759）序『蒔絵大全』巻二にも描かれ、世流布の諺であった。<https://doi.org/10.20730/100289411>（第8コマ）



第9図 「福禄寿の竜釣り」
福岡市美術館本など諸本に所見。



第10図 「普賢菩薩の鳩飼」
福岡市美術館本など諸本に所見。



第11図 「酒呑童子の宴」

福岡市美術館本などに所見、諸本間で小異があるが、当該本は酒呑童子、おとく女、狸々、牛若、武蔵坊弁慶、人丸、恵遠法師、西行、小野小町、そして小鬼から成る。末尾に「此一巻土佐光信狂畫圖／周信寫（落款）」とある。



②個人蔵『化け猫草子絵巻』

江戸時代中期。
名古屋市博物館『もしも猫展』
図録より引用。



①大英博物館蔵『戯画図巻』より「鹿・猫・狸の三曲合奏」
<https://www.britishmuseum.org/collection/image/219405001>
© The Trustees of the British Museum

【参考図版】

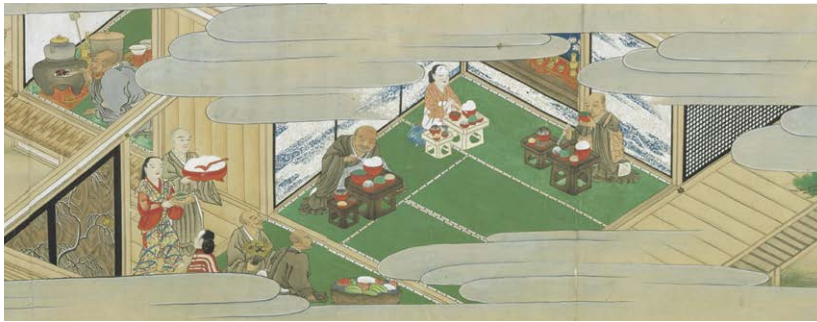


③福岡市美術館蔵
『異代同戯図巻』
「酒呑童子の宴」



上：④サントリー美術館蔵『酒伝童子絵巻』 狩野元信筆 大永2年（1522） 禁無断転載

下：⑤フランス国立図書館蔵『酒飯論絵巻』 <http://archivesetmanuscripts.bnf.fr/ark:/12148/cc58897p>



上：⑥フランス国立図書館蔵『酒飯論絵巻』 <http://archivesetmanuscripts.bnf.fr/ark:/12148/cc58897p>

下：⑦福岡市美術館蔵『異代同戯図巻』より「鶯と蛙の詩歌合」